



日本ブームス協会特別例会

ブームス没後100年記念

”W. ケンプ、E. フィッシャー等  
ドイツ・ピアノロマンティシズムの伝統を受け継いだ最後のピアニスト”



# デートレフ・クラウス

D e t l e f K r a u s s  
D e t l e f K r a u s

ピアノ レクチャーコンサート

曲目：

J. Brahms

Variationen über ハンガリーの歌による変奏曲

ein ungarisches Lied

Op. 21-2

Fantasien

幻想曲集

Op. 116

レクチャー：《ブームスのピアノ曲について》

## 【デートレフ・クラウス教授略歴】

1919年ハンブルクに生まれる。16歳の時、バッハの平均律全曲演奏によってデビュー。その後、ヴィルヘルム・ケンプに師事する。

1958年ハンブルクにおけるブームス・フェスティヴァルに出演。ブームスの全ピアノ作品連続演奏会を、ドイツをはじめ世界各地で開いており、また現在までに、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏を50余都市で行っている。オーケストラとの共演は、ベルリン・フィルをはじめとするドイツ国内はもとより、チェコ・フィル、パリ音楽院等と世界各地に及び、指揮者との共演もサヴァリッシュ、カイルベルト、ヨツフム等と輝かしい実績を誇っている。

1967年モントリオール万国博覧会では、ドイツを代表してリサイタルを開き絶賛を博した。レパートリーは幅広く、古典から現代にまで及んでいる。教育者としては、エッセンのフォルクヴァンク・ホッホシューレのピアノ科主任教授を務めた。

武蔵野音大の招聘により数度来日、ベートーヴェンの全ピアノ・ソナタ、ブームスの全ピアノ作品、バッハの平均律クラヴィア曲集全曲の演奏と講義を行っている。

今日、国際コンクールの普及、音楽情報メディアの発展に伴い、いわゆるピアニストの”平均化”現象が起こっている。いわゆるドイツ人ピアニストの最近の演奏も、彼らの伝統を踏まえているとは言つても、次第に”国際的””近代的”なスタイルに変容しつつある。そんな中で、D. クラウス氏こそは、紛れもなく今や忘れられつつある古きドイツ最良の音楽文化を受け継いでいる、数少ないひとりである。その原譜をたどるなら、クラウス氏の先生のW. ケンプ、更にケンプとA. ルービンシュタインを教えたバルト教授、その先生のH. v. ピューローに行き着く。その文化を一言で表現するなら、つまり「ピアノで語る (Schprech)」ということである。現在70代であられる氏の演奏は、ピアノの性能を熟知しきった驚異的な演奏技術を持って、その背後に背負ってきた偉大なドイツの文化そのものを正に語ってくれる。ドイツ国際ブームス協会の会長である氏が、ブームス没後100年に際し、日本ブームス協会のために演奏とお話をされる今回の企画は、そうした言うならば”真正”のドイツを体験するまたとない機会として、貴重なものとなるであろう。

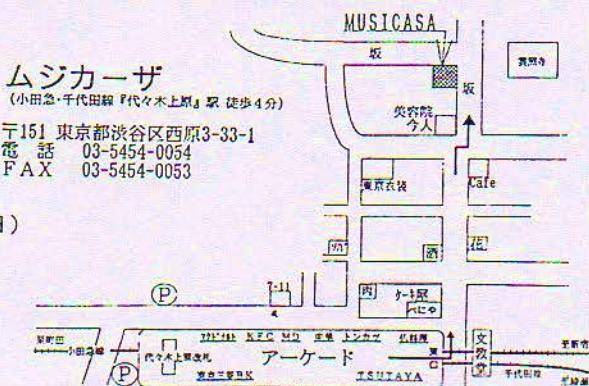
1997年5月25日(日)午後2:30開演



入場料：4,000円(一般)、3,500(会員)、5,000(当日)

於、Musicasa ムジカーザ(代々木上原)

連絡先：03-3705-3805(日本ブームス協会)



## データレフ・クラウス教授 「ブラームス・レクチャーコンサート」

208 ハンブルクの国際ブラームス協会会長のクラウス先生が1995年5月以来、2年ぶりに武藏野音大の招きで来日され、わが協会の「没後100年記念」行事の一つの「レクチャーコンサートの特別例会」に来ていただきました。

協会にとっては初めての「ムジカーザ」MUSICASA（小田急・代々木上原駅近く）で、5月25日（日）午後2時半開演。演奏曲目とテーマは：

- 1) 幻想曲集 op. 116
- 2) ハンガリーの歌による変奏曲 op. 21-2

レクチャーの通訳は滞独生活も長く、エッセンでクラウス先生に2年間師事していた山本万紀子さんでした。

クラウス先生の推進で今年、ミュンヘンの HENLE社から刊行された「幻想曲集 op. 116」のファクシミリ版の開示紹介もあり、100席の会場を埋めた出席者には印象深い先生の演奏とレクチャーでした。

この後、代々木上原駅近くの「プラッセリー・ヴェラ」で先生歓迎レセプションが開かれ、先生を囲んでの乾杯が繰り返されました。

この席上での先生のお話では、1967年の初来日から今年はちょうど30年になることです。また16年間つとめて来られたハンブルクの協会の会長の職を、この春の総会で北独ハイデの協会のE.ベッシュ教授(Prof. E. Besch)に譲り、引継ぎが終わるまで副会長として残ることです。

この日の例会には珍しく地方から数人の会員、クラウス先生のお弟子さんたちなどの参加もあって、コンサートとレセプションの両方が定員を越す盛況でした。

— — # — — b — —

今回の先生の来日はヨーロッパ各地でも催されている数多くの「没後百年記念行事」の間を縫っての約2週間（5月12日～29日）の滞在でしたが、その間に武藏野音大主催の2つのコンサートがありました。

5月19日：18:30から、武藏野音大のベートーベン・ホールでの「オール・ブラームスプログラム」のリサイタル：

- 6つの小品 op. 118より2曲 (No. 4 & No. 5)
- ピアノ・ソナタ 第3番 へ短調 op. 5
- 3つの間奏曲 op. 117
- ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ op. 24

5月27日：19:00 から、パルナソス多摩で「ブラームス室内楽の夕べ」：

- クラリネット三重奏曲 イ短調 op. 114
- ホルン三重奏曲 変ホ長調 op. 40
- ピアノ五重奏曲 へ短調 op. 34

「室内楽の夕べ」では3曲のピアノをすべてクラウス先生が演奏。先生にとっては他の6人の演奏者（いずれも同音大の教授、客員教授、講師）とは初めての共演とのことで、来日早々から音合わせのリハーサルがたいへんだったと、譜めくりなど連日のお手伝いをした青木紀久子会員のお話でした。

私は多摩まで出かけてこの「室内楽の夕べ」を聴きました。異なる2つの管楽器を含むトリオ2曲のピアノと、弦楽四重奏を相手のピアノの、要所要所を押された演奏の弾き分けの見事なこと。失礼を顧みず言えば、ブラームスをいたずらに60年余弾いていても出来ることではありません。

先生の再来日を、会員の皆さんともども切に願うものです。（八木 勇）